



クラス		受験番号	
出席番号		氏 名	

高1 記述
国語

二〇一四年度

全統高一記述模試問題

国語 (一〇〇分)

二〇一五年一月実施

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、この「問題」冊子は、20ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。(受験届・解答用紙)冊子表紙の注意事項を熟読すること。
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の国語の解答用紙を切り離し、所定欄に **氏名**(漢字及びフリガナ)、**在学高校名**、**クラス名**、**出席番号**、**受験番号**(受験票発行の場合のみ)を明確に記入すること。
- 五、試験終了の合図で右記四、の **の**箇所を再度確認すること。
- 六、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。

河合塾



【一】 次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 六十点）

もともと、雑多な本や資料を買い込む性格で、机の周りや本棚がきれいに片付いていたためしがないのだが、そのシヨウジョウ^aウがますます悪化している。¹『鉄道ジャーナル』という雑誌を一九六七年のソウカン号から百号分買ったかと思うと、その隣には、一九七〇年代の女性雑誌『アンアン』、『ノンノ』が数十冊置かれていたといった具合である。²

お前は音楽学者のはずなのに研究費を使って何をやっているのか、というお叱りの声が聞こえてきそうだが、実はこれらは最近^Aした『サウンドとメディアの文化資源学』という著書の一章を書くために集めた資料である。

一九七〇年前後、当時の国鉄^註による蒸気機関車の全廃を前に起こった「SLブーム」^註の時期に次々と出された、SLの音を収録したレコードを取り上げた章なのだが、それにしても、音やレコードをテーマにした研究に、何も鉄道趣味の雑誌や女性雑誌まで買う必要はなからうと思われそうだ。

最近まで音楽の研究者は、音楽関係の資料さえおさえていれば済んだ。作曲家マリー・シェーファアの「サウンドスケープ」^註の思想あたりから、狭義の音楽をこえた環境の音の形作る「音の文化」が視野に入ってきたことはたしかで、私がSLの音のレコードなどをテーマにしたというのも、まさにそういう状況の延長線上のことなのだが、「音」をテーマにしているという限りにおいて、とりあえずは「音楽」の概念を広げるといふ程度の話で済んでいた。だが、今や問題はそんなに簡単な話ではなくなった。

言うまでもなくSLの音は、最初から「音楽」として^Bされ、作られたのではない。「SLブーム」の時代に作られたレコードの《SLの詩情―消えゆく煙のバラード》などというタイトルをみると、たしかにそれが「音楽」の延長線上で捉えられた局面があったのだらうと想像する反面、皆がそのように受け止めたというわけでもなからうという気がしてくる。実際、同じSLレコードと言っても、たとえば《ドキュメンタリー 蒸気機関車峠にいどむ》というようなのは、聴く人の層も聴き方も、ずいぶん違っていたことだらう。

「SLブーム」の時代に、機関車の汽笛やドラフト音の価値が見出されたことは間違いないのだが、そのあり方は決して様ではない。その違いは、誰がどのようなコンテクスト^(註)でどのような価値観のもとに認識したかということにC^(註)しており、状況に応じて全く別様のものにもなりえたのである。ちょうど、ゴミ箱で発見された本が、発見する人の関心次第で歴史資料にも風俗資料にも（そして場合によっては昼寝用の枕にも、はたまた単なる「資源ゴミ」にも）なりうるというのと同じである。物事の価値というのはすべてそんなものであって、対象自体に内在しているというよりは、受け取る側の文化や社会の状況と相関的に生じてくるのである。

それゆえ、その価値については、誰がどのような立ち位置でどのような観点から評価したのかということとの関連で考えることが不可欠だ。ボウトウ^cにあげた鉄道雑誌と女性雑誌はいずれも、SLの音の価値が注目される際の背景やコンテクストを考えるために集めたものである。鉄道雑誌の調査を通してわかったのは、この時期、鉄道趣味のあり方をめぐる論争があり、鉄道マニアがSLの音に関心をもつようになった背景には、そうした状況の変化があったということである。他方、ほぼ同時期の『アンアン』や『ノンノ』の旅行記事からは、「アンノン族^(註)」と呼ばれた女性たちの当時の旅行スタイルの中で、蒸気機関車の牽^ひくドンコウ^d列車の茶色ですすけた車両に乗ることがトレンド^(註)となっており、そのことが、SLの音がノスタルジックな表象と結びつく要因になったということがわかってくる。

一口にSLの音への注目といっても、鉄道マニアと「アンノン族」とでは、そこでの価値のあり方も、背後にあるコンテクストも全く違っている。音をめぐる文化が、こうした複数のコンテクストが、時には重なり合ったりぶつかり合ったりしながら、その関係を刻々と変えてゆくことによって形作られるとなれば、その全体を見渡すためには、そうした個々のコンテクストにまで立ち戻り、それらのおりなす力学を丹念に解きほぐしてゆくことが必要になる。

私がこの本のタイトルにあえて「音楽学³」という語を避けて「文化資源学」という言葉を使ったのも、そのことと関わっている。「音楽」もまた、誰かが何らかの観点からその価値を見出すという行為と不可分な形でありたつものだという基本的な考え方がそこにはある。音楽は決して最初から「ある」ものではなく、音楽に「なる」ものである。その限りで「音楽」は決して宙

に浮いて存在する特別な概念ではなく、音の文化をおりなす音楽以外の様々な形態と地続きな形で存在しており、容易に入れ替わることが可能なのである。

多様なコンテキストや価値観との関わり方次第で、「音楽」の周辺には、その括りにおさまらない様々な価値が立ち現れてくる可能性がある。それらはいずれも、誰かがある観点から発見するという行為と相関的に立ち現れてくるのであり、その全体をゆるく引つ括める概念として「文化資源」という語が最適なのである。まさに「資源ゴミ」として発見されるゴミ箱の本に

D されるように、「資源」という概念はこれらの価値のあり方やそれを生み出すメカニズムを見事に言い表しており、そのレベルに着目することによって、「音楽」や「芸術」といった使い古された言葉が取り逃がしてしまう様々な可能性を掬い取ることが可能になるのである。

こういう局面で「資源」という語を使うことには抵抗を感じる向きもあるだろう。この語には、「先進国」が「第三世界」の鉱物資源などに目をつけ、現地の人がその価値に気づいていないのを良いことにタダ同然で搾取してきたような歴史を思い起こさせる「負のイメージ」がある。そこまでいかなくとも、「資源」という語にはどうしても金銭に換算するようなニュアンスがつきまとうところがあるので、芸術や文化が世俗の金や権力にまみれることを嫌う「純粋主義者」には受け入れ難いところもあるろう。しかし考えてみると、「資源」の概念が搾取のような事態と結びつきやすいというのも、その価値が潜在的であり、その価値を見いだした者にのみ現れ出てくるということの結果なのである。

別の見方をするなら、芸術や文化にあえて「資源」という概念を適用してみるということは、あらゆるものの価値は常に、誰かが一定の観点から評価する行為とともにあるという事実を顕在化させ、無自覚に一定の価値観を受け入れてしまう危険を排除することにもつながる。そのような見方は、「音楽」という概念によって密かに持ち込まれるイデオロギーや固定観念を排し、音に関わる文化の多様な広がりを見界におさめることを可能にするだろう。そのことはまた、われわれが疑うことなく「音楽」と呼び習わしてきたものについても、これまでに見ることでできなかった斬新な景色をみせてくれるに違いない。

今回の新著では、SLの音のほか、寮歌、チンドン屋、民謡、映画の弁士の語り、ソノシート^(注)といった多彩な題材を取り上げ

ている。「音楽」という概念の境界線上の事例をいろいろ集め、その周囲で起こっている事態を見極めようとした結果なのだが、この雑多なテーマそれぞれについて、SLの音の場合と同じような資料集めをやったのだから大変だ。私の本棚には、『バナナ輸入エンカク史』、『全国花街めぐり』、『愉^{たの}しいフォーク・ダンス』など、一体何のこっちゃ、というくらいに怪しげな本が溢^{あふ}れる結果になってしまっている。そういう状況があるいは、文化資源学という学問のおもしろさを最も雄弁に物語っていると言^いうべきなのかもしれないのだが。

(渡辺裕「『価値』の生み出される現場へ」)

(注) ○ 国鉄……日本国有鉄道。現在のJRの前身。

○ SL……蒸気機関車。

○ 「サウンドスケープ」の思想……「音楽」だけを特別扱いするのではなく、環境の中で聞こえてくる音の全体を「音風景」として捉える考え方。

○ コンテクスト……脈絡。背景。あるものを取り巻く状況。

○ アンノン族……一九七〇年代の流行語。『アンアン』『ノンノ』といったファッション雑誌の読者で、とくにそうした雑誌やガイドブックを片手に一人旅や少人数での旅行をする若い女性のことを指した。

○ トレンド……流行。

○ ソノシート……薄く柔らかいビニール製のレコード盤。一九六〇～七〇年代に雑誌の付録などで多く利用された。

問一 傍線部a～eのカタカナを漢字に改めよ(楷書で正確に書くこと)。

問二 空欄A～Dに入れるのに最も適当な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じも

のを繰り返し用いてはならない。

ア 上^{じやう}梓 イ 依存 ウ 構想 エ 融合 オ 象徴 カ 奨^{しょう}励

問三 傍線部1「『鉄道ジャーナル』という雑誌」、傍線部2「女性雑誌『アンアン』、『ノンノ』とあるが、筆者は、こうした雑誌を手がかりにしてどういうことをしようとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 「SLブーム」の時代にSLの音に価値が見出されたことについて、誰がどのようなコンテキストでどのような価値を見出したかは決して一樣ではないと考え、そうした個々のコンテキストや背景について考察することを通して、SLの音をめぐる文化の全体像を見渡そうとしている。

イ もはや音楽の研究者にとって音楽についての考察など必要なくなり、音楽をこえた環境の音を形作る「音の文化」を視野に入れることが求められるような時代になっているという事情を踏まえ、かつて流行していた趣味やファッションについて、多くの資料をもとに考えようとしている。

ウ SLの音は最初から「音楽」として作られたわけではないにもかかわらず、「SLブーム」の時代にはそれが「音楽」の延長線上でしか捉えられなくなってしまったということに着目し、そうした状況の中でSLの音がどのような背景やコンテキストで注目されたのかを、個々に検討しようとしている。

エ 狭義の音楽だけではなく「音の文化」にも関心をもつことが音楽の研究者に求められている状況の中で、これまで音楽についてしか考えてこなかった自身のあり方を省みたが、何を資料とすればよいかよくわからなかったため、とりあえず雑多な資料を集め、音楽を取り巻く文化について考察しようとしている。

オ 鉄道マニアがSLに関心をもった背景には鉄道趣味のあり方をめぐる論争があったことや、「アンノン族」の間では蒸気機関車の牽く茶色ですすけた車両に乗ることがトレンドだったことなどに注目し、ある時代の流行についてその背景やコンテキストは一樣ではないことを明らかにしようとしている。

問四 傍線部3「あえて『音楽学』という語を避けて『文化資源学』という言葉を使った」とあるが、筆者は、このような言葉の使い方をすることによってどういう意義があると考えているか。百字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問五 傍線部4「あらゆるものの価値は常に、誰かが一定の観点から評価する行為とともにある」とあるが、「ものの価値」について、これとは対照的な考え方がある。それはどういう考えだと思われるか。本文を踏まえて四十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問六 本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選び、記号で答えよ。

ア SLの音、寮歌などを音の文化として研究してきた「文化資源学」は、結果的に音楽がそうした音文化とは異質で特別な概念であるという事実を明らかにした。

イ 芸術や文化が世俗の金や権力にまみれることを嫌う「純粹主義者」には、SLの音を既存の「音楽」に含めてしまう「文化資源学」は受け入れ難いものである。

ウ 資源という言葉に「負のイメージ」もあることを考えると、「文化資源学」などという表現に違和感を覚える者がいるとしても不思議ではない。

エ 「サウンドスケープ」の思想が広く浸透したことによって、今日、「音楽」の概念をどう広げるかという問題こそが、大きな懸案になっている。

オ 既成の「音楽」や「芸術」の概念に拘泥することは、そうした概念におさまりきれない価値の発見を阻害する可能性がある。

カ われわれの周囲には「音楽」に属する音とそうでない音があるが、それらの違いを見極めることが、いま求められている。

国語の問題は次の頁へ続く。

【二】次の文章は、一九九七年に発表されたものである。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

死というものに対する感覚が、近年^{かわ}変わってきているように思われる。

こちらが六十代も半ばにかり、若い頃とは違って次第に死が遠い出来事とは感じられなくなったせいもあるけれど、そのような個人的事情とは別に、人が死ぬという事態の受け止め方が、昔とは異なってきた。

それはおそらく、寿命の延長に従い、一般に死亡年齢が高くなったためだろう。

かつては、乳幼児の死亡率が高かった。折角^{せうかくま}生れても、育つことのかなわぬ子供が多かった。しかし第二次大戦後から高度経済成長期にかけて、乳幼児の死亡率は著しく減少した。

と同時に、平均寿命も急速に延び始めた。人間は必ずいつか死ぬという大前提をもとに考えれば、死そのものの高齢者によって占められる比率が増大したわけである。死の高齢化ともいえるだろう。そして高齢者¹の死は、若い人々の死に比べてより自然な感じで受け入れられる。もう十分に生きたのだ、と残された者も納得する。

そのことを痛感したのは、自分の父親が九十歳で他界した折だった。もちろん親の死は痛みを与えるが、明治・大正・昭和・平成と四つの時代を生き抜いた生命の終焉^aは、長かったな、と感慨を覚えつつ静かにその死を見送る気分を与えてくれた。死が老齡の出来事であったという事態が、死別の哀しみを随分軽減してくれるものだ、と長生きした父にあらためて感謝の念を抱いたほどだった。

病床の父と短い会話を交した^{かわ}憶えがある。入^い歯^はを外していたために発音が曖昧で聞き取りにくくはあったが、およそこんな主旨のことを語った。

——自分は長い歳月を生きて来た。だから、ある時期から後は、もういつ死んでもいい、と思うようになった。ところが最近、その考え方は間違っていたのかもしれない、という気がし始めた……。

そこまで述べた時、看護婦が来たか見舞客が訪れたかして、話は中断した。続きはまた後刻^{ごこく}聞こうと思っっているうちに、つい

機会を失ってそのまま父は旅立ってしまった。

いつ死んでもいい、との思いがなぜ反転したのか、その理由と経過をこそ教えて欲しかったのに、まだ時間はあるだろう、と油断していたこちらが迂闊であつた。

しかし、父の言葉の輪郭をなぞるようにして、およその内容を想像してみることは可能である。

いつ死んでもいい、それは自然の手に委ねておけばいいことだ、とよく語っていたのは、老いてもまだ元気で、一日に一度はステッキをつけて散歩に出かけていた頃の父だった。ところが入院生活を強いられるにいたって、このままではならぬ、もう一度退院してかつての暮しを取り戻したい、と願つたのではないか。そして、死ぬのはその先のことにして欲しいものだ、と望んだのではないだろうか。

いや、これはあまりに皮相な想像に過ぎぬかもしれぬ。ベッドの父はたしか、考え方を問題にしていた。としたら、入院生活の延長上の死を拒んで退院を希求するにしても、そのもつと奥に、自然に委ねた死ではなく、生きる意志とぶつかり合う死を眺めようとしていたのではなかったか。更にいえば、そうすることによってこそ死が完成する、と思うようになったのではあるまいか。

これもまた、当時五十代を終ろうとしていた老いたる息子が、九十歳に達した父親の心の壁に描き出した勝手な妄想である可能性が高い。

しかしいずれにしても、長生きした父の死が息子に問題を投げかけ、宿題を残していったことに間違いはない。息子自身も老いかけているために、宿題は一層切実で貴重なものとなる。つまり高齢者の死は、生の長期にわたる蓄積の末に到来するだけに、生と死の関わり方を鮮明に浮かび上がらせてくれるように思われる。

死が生の終りであることは同じだが、それが若年者のものか高齢層のものかによって、死の与える影響は異なってくる。

より若い人々の死は、前途を絶たれたという悲傷が大きく、病であれ、事故であれ、なぜそのような不幸に出遭わねばならなかったか、と嘆くしかない。

けれど充分に生きた高齢者の場合には、若者にとつての前途は、既に消化された過去に転じている。少なくともその分だけは、悲しみが軽減される。老人の死は相対的には受け入れやすく、年齢に不足はない、と諦めることが許されるともいえよう。

そしてかくも人々の寿命が延び、老人がふえてきた以上、死はますます老人のものとなり、生命の自然の終焉の様相を強め、いわば日常化の傾向を辿りつつある。

もつとも、これは世の中が平和であり、戦争や大災害が少ない場合にのみ実現する事態なのであって、そのことには感謝せねばなるまい。一貫して延び続けてきた日本人の平均寿命が、一九九五年の阪神淡路大震災によって微減したと聞くと、不慮の死の規模の大きさと、そこで失われた様々の年齢の生命について思いを馳せぬわけにはいかない。

にもかかわらず、我々の平均寿命が依然として高水準であることに変わりはなく、大勢としては死の高齢化、日常化の傾向が今後も進むことだろう。

安楽死とか尊厳死といった問題が広く論ぜられるようになった根底には、おそらく死の日常化現象が横たわっている。

つまり、死とは待ったなしに襲いかかる災いであり、異常の出来事であり、忌むべき不吉事である、との見方が以前に比して弱まり、むしろ死を即自的なものから対自的なものに変え、ライフプラン上の一点として眺めるような姿勢さえ生れてきているかの感がある。

かつての老人は、「お迎えが来る」という言葉で自分の死を表現した。先方から迎えが来るのを待つとしたら、それは選択の余地のない受身の態度である。

それに対して、自分はこのように死にたい、と前もって意思を述べ、死の形について考えを明らかにするのは、死を対象化しているからこそに他ならない。死は口にするのも忌まわしい禍事^yではなく、自分で始末をつけねばならぬ人生最後の仕事に変化してしまったのではないだろうか。死が日常化した以上は、日常レベルでの仕事が発生するのは避けようもないことだろう。

著しく高齢化が進んだ結果、生と死の距離は接近し、両者の間に友達づき合いも起りかねぬような気さえする。

しかしこれは人間にとって、はたして幸せなことであるのか、と首を傾げ^{かし}たくなる節^{ふし}もある。

なぜなら、たとえいかなる形で世間の生と死が関つていようと、死が実現するのは常に個人の生を通してであつて、死は限りなく自分のものでしかないからだ。

何をどのように論じようが、死が訪れた時には一切が無に帰してしまふ。そして生きている人間には、結局、死を論ずることは不可能だろう。まだ死んだことはないためである。

としたら、死はやはり恐ろしいものとして在^あつて欲しい。それが不可解などにもならぬものであればあるほど、かえつて生の輝きがます、といったもので在^あつて欲しい。

³ 高齢者の死は、若い人の死に比べれば確かに自然ではあるだろう。しかし、個々の生命にとって、死は大いなる不自然であることが決して忘れられてはならないと考える。

(黒井千次「自然と不自然」)

(注) ○ 即自的・対自的……ここでは、「即自的」とは死が自らと不可分で一体のものであること、「対自的」とは自らの死を対象として捉えることを指す。

問一 波線部 a ㄣ c の漢字の読みを、ひらがなで答えよ。

問二 傍線部 x 「不慮の」、y 「禍事」を言い換えたものとして最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

x 不慮の				y 禍事			
ア	縁起の悪い	イ	人為的な	ア	まがまがしいこと	イ	悲惨なこと
ウ	思いがけない	エ	悲劇的な	ウ	めったにないこと	エ	煩わしいこと
オ	避けられない			オ	公言できないこと		

問三 傍線部 1 「高齢者の死は、若い人々の死に比べてより自然な感じで受け入れられる」とあるが、筆者は、「高齢者の死」が「自然な感じで受け入れられる」ようになったことで、問題が生じていると考えている。それはどのような問題か。本文の趣旨に即して百十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問四 傍線部2「勝手な妄想」とあるが、これはどういうことを言ったものか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自身が老いたせいもあって、死にまつわる父の言葉を、単に個人的な実生活に即したものと捉えてあれこれ想像するだけでなく、それを死生観にかかわるものと捉えるような見方にもとらわれてしまったということ。

イ 死に関する父の考え方が反転した理由はいつかわかるだろうと高^{たか}を括^{くく}っていたが、油断している間に父が他界してしまったため、父の言葉の真意をあれこれと勝手に想像するしかなくなってしまったということ。

ウ 死を間近にした父の言葉は、実際には、生への強い意志をもち死と最後まで闘ってこそ死は完成するということを意味していたが、それを単にかつての暮らしを取り戻したいという意味だと取り違えていたということ。

エ 生前の父は、入院を強いられたことでかえって死そのものを拒もうとする強い意志が生じたということを語っていたが、その言葉が契機となって、生と死の関係について思いをめぐらすようになったということ。

オ 父があえて残そうとした死についての思わせぶりの言葉を聞いて、それが高齢になりつつあった息子に向けられた切実な宿題のようなものだと感じ、その宿題に対する答えをあれこれと模索することになってしまったということ。

問五 傍線部3「高齢者の死は、若い人の死に比べれば確かに自然ではあるだろう」とあるが、そのように言えるのはどうか。筆者の考えに即して六十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問六 筆者の考えと合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 安楽死や尊厳死といった問題が広く論じられるようになったのは、いつの時代の人々も死への恐怖から逃れられないからだといえる。

イ 死者が生前に発した言葉は二度と聞くことができないものであり、その死者が言おうとしていたことを後で想像することは不可能である。

ウ 死は個人の生を奪うことを通して実現されるものである以上、生と死が接近するのはいつの時代も避けられないことである。

エ 死を選択の余地のないものとして受身の態度で迎えるという姿勢が一般化したのは、生と死の距離が接近してしまったからだと考えられる。

オ 死は、生とただらかに連続しているものではなく、生との間に緊張関係を作り出すものとして捉えられるべきである。

国語の問題は次の頁へ続く。

【三】次の文章は、夫（「男」）がしばらく通わずにいた新しい妻（「今の女」）のもとを久しぶりに訪れた折の話である。読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

この男、いとひききなりける心にて、あからさまにとて、今の人のもとに、昼間に入り来るを見て、女、「にはかに、殿、おはすや」と言へば、うちとけてゐたりけるほどに、心騒ぎて、「いづら、いづこにぞ」と言ひて、櫛の箱を取り寄せて、白き物を付くと思ひたれば、取り違へて、掃墨入りたる畳紙を取り出でて、鏡も見ず、うち装束きて、女は、「『そこに、しばし。』」**A**「入りましたまひそ」と言へ」とて、是非も知らずきしつくるほどに、男、「いとくも、疎みたまふかな」とて、簾をかき上げて入りぬれば、畳紙を隠して、おろおろにならして、うち口覆ひて、優まくれにしたてたりと思ひて、斑らに指形に付けて、目のきろきろとして、またたきゐたり。男、見るに、あさましう、めづらかに思ひて、いかにせむと恐ろしければ、近くも寄らで、「よし、今しばしありて、参らむ」とて、しばし見るもむくつけければ、去ぬ。

女の父母、かく来たりと聞きて、来たるに、「はや、出でたまひぬ」と言へば、いとあさましく、「名残なき御心かな」とて、姫君の顔を見れば、いとむくつけくなりぬ。おびえて、父母も倒れ臥しぬ。女、「など、かくはのたまふぞ」と言へば、「その御顔は、いかになりたまふぞ」とも、**B**「言ひやらず。『あやしく、など、かくは言ふぞ』」とて、鏡を見るまに、かかれば、我もおびえて、鏡を投げ捨てて、「いかになりたるぞや。いかになりたるぞや」とて泣けば、家のうちの人も、ゆすりみちて、「これをば思ひ疎みたまひぬべき事をのみ、かしこにはしはべるなるに、おはしたれば、御顔のかくなりたる」とて、陰陽師呼び騒ぐほどに、涙の落ちかかりたる所の、例の肌になりたるを見て、乳母、紙おしもみて拭へば、例の肌になりたり。⁷ かりけるものを、いたづらになりたまへるとて、騒ぎけるこそ、かへすがへすをかしけれ。

（『堤中納言物語』「はいずみ」）

- * 1 ひききりなりける心……せつかな気性。
 2 言へば……主語は「今の人（女）」の侍女。
 3 白き物……白粉。
 4 掃墨……眉墨。
 5 うち装束きて……化粧して。
 6 きしつくる……顔にこすりつける。
 7 おろおろに……いい加減に。
 8 優まくれに……優美に。
 9 ゆすりみちて……大騒ぎして。
 10 事……呪い。
 11 かしこ……もとの妻。
 12 陰陽師……天変・占いを司る職。ここでは、呪いを払うために呼ばれた。

問一 傍線部1「あからさまにとて」、3「是非も知らず」、4「いとくも」を現代語訳せよ。

問二 傍線部2「心騒ぎて」は、誰の、どのような様子を表したのか。三十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問三 空欄 A・B には、いずれも平仮名一文字の副詞が入る。文意を考えて最も適当なものを、それぞれ記せ。

問四 傍線部5「あさましう」・6「あさましく」とあるが、どのようなことに驚き呆れた（あき）というのか。それぞれ簡潔に説明せよ。

問五 傍線部7「かかりける」とあるが、どういうことか。六十字以内（句読点等を含む）で具体的に説明せよ。

四 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。)(配点 四十点)

1 閩富人某、以^二奸黠^一起家。一日、有^一估客負重貲、避^二雨舍^一旁。某^二艶^一其貲、

2 慇勤^二為^一一夕留。客以^二富室^一亦不^レ疑。醉^二而殺^一之、取^二其金^一、人不^レ知也。居^二

無^レ何、電擊^二其禾^一。某怒^二發^一痴、訴^二神于^一県。県令亦恍惚^二若^レ有^レ所憑^一。竟

3 飭^二差^一差違遽^二不知^レ所出^一、聞^二空中語^一。曰、「汝奉^レ命拘^レ審耶。我且^レ至。」

4 差即解^二某赴^一訊、某語侵^二神^一。差作^二鬼語^一曰、「却^レ財殺^二賈^一屍埋^二汝家^一。有^レ

5 之乎。」某色変詞塞^二令^一大声曰、「天理昭彰、鬼神顯^二異^一。」立^二往按驗^一、

6 果得^二屍如^一生。收^二某致^一法。

『巢林筆談』による)

(注) ○閩……地名。現在の福建省。 ○奸黠……悪賢いこと。 ○估客……商人。「賈」も同じ。 ○賁……財物。 ○艶……うらやましく思う。

○禾……穀物。 ○癡……正常な判断が出来なくなる。 ○県令……県の長官。 ○恍惚……ぼんやりとするさま。 ○差……県令の下役。

○遅遽……あわてるさま。 ○解某赴訊……審議のために「某」を役所に出頭させる。 ○侵神……神を侮辱する。

○鬼……神。「鬼神」も同じ。 ○按驗……調べる。

問一 傍線部 a「竟」・b「即」・c「果」の読み方を、送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。(現代仮名遣いでもよい。)

問二 傍線部 1「有估客負重賁」は、「こかくぢゆうし估客の重賁を負ふもの有り」と読む。この読み方に従って、解答欄の原文に返り点を施せ。(送り仮名は不要。)

問三 傍線部 2「慇懃為一夕留」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 商人は自分の財物が狙われていると感じ、「某」にひと晩泊めてほしいと丁寧に頼んだということ。

イ 商人は「某」の財物を手に入れるために、自分の家に「某」を泊まらせようとうまく誘ったということ。

ウ 商人は自分の財物を守ろうと考えて、とりあえずひと晩は「某」の家に泊まることにしたということ。

エ「某」は商人の財物を奪い取るために、商人に自分の家にひと晩泊まるよう丁寧にすすめたということ。

オ「某」は商人の財物に心を奪われたが、親切心から商人をひと晩自分の家に泊まらせようとしたということ。

問四 傍線部 3「県令亦恍惚若有所憑」を、平易な現代語に訳せ。

問五 傍線部4「我且_レ至」・5「有_レ之乎」を、すべて平仮名で書き下し文に改めよ。

問六 傍線部6「収_レ某致_レ法」とあるが、「某」はどうして処罰されることになったのか。その理由を八十字以内（句読点も含む）で説明せよ。

© Kawaijuku 2014 Printed in Japan

無断転載複写禁止・譲渡禁止